**受難節第４主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年3月30日**

**「主は生きておられる」**

**ルツ記3章1～18節**

 **3:1 しゅうとめのナオミが言った。「わたしの娘よ、わたしはあなたが幸せになる落ち着き先を探してきました。**

 **3:2 あなたが一緒に働いてきた女たちの雇い主ボアズはわたしたちの親戚です。あの人は今晩、麦打ち場で大麦をふるい分けるそうです。**

 **3:3 体を洗って香油を塗り、肩掛けを羽織って麦打ち場に下って行きなさい。ただあの人が食事を済ませ、飲み終わるまでは気づかれないようにしなさい。**

 **3:4 あの人が休むとき、その場所を見届けておいて、後でそばへ行き、あの人の衣の裾で身を覆って横になりなさい。その後すべきことは、あの人が教えてくれるでしょう。」**

 **3:5 ルツは、「言われるとおりにいたします」と言い、**

 **3:6 麦打ち場に下って行き、しゅうとめに命じられたとおりにした。**

 **3:7 ボアズは食事をし、飲み終わると心地よくなって、山と積まれた麦束の端に身を横たえた。ルツは忍び寄り、彼の衣の裾で身を覆って横になった。**

 **3:8 夜半になってボアズは寒気がし、手探りで覆いを捜した。見ると、一人の女が足もとに寝ていた。**

 **3:9 「お前は誰だ」とボアズが言うと、ルツは答えた。「わたしは、あなたのはしためルツです。どうぞあなたの衣の裾を広げて、このはしためを覆ってください。あなたは家を絶やさぬ責任のある方です。」**

 **3:10 ボアズは言った。「わたしの娘よ。どうかあなたに主の祝福があるように。あなたは、若者なら、富のあるなしにかかわらず追いかけるというようなことをしなかった。今あなたが示した真心は、今までの真心よりまさっています。**

 **3:11 わたしの娘よ、心配しなくていい。きっと、あなたが言うとおりにします。この町のおもだった人は皆、あなたが立派な婦人であることをよく知っている。**

 **3:12 確かにわたしも家を絶やさぬ責任のある人間ですが、実はわたし以上にその責任のある人がいる。**

 **3:13 今夜はここで過ごしなさい。明日の朝その人が責任を果たすというのならそうさせよう。しかし、それを好まないなら、主は生きておられる。わたしが責任を果たします。さあ、朝まで休みなさい。」**

 **3:14 ルツは、夜が明けるまでボアズの足もとで休んだ。ルツはまだ人の見分けのつかない暗いうちに起きた。麦打ち場に彼女の来たことが人に知られてはならない、とボアズが考えたからである。**

 **3:15 ボアズは言った。「羽織ってきた肩掛けを出して、しっかりつかんでいなさい。」ルツがしっかりとつかんだ肩掛けの中に大麦を六杯量ってルツに背負わせると、ボアズは町へ戻って行った。**

 **3:16 ルツがしゅうとめのところへ帰ると、ナオミは、「娘よ、どうでしたか」と尋ねた。ルツはボアズがしてくれたことをもれなく伝えてから、**

 **3:17 「この六杯の大麦は、あなたのしゅうとめのところへ手ぶらで帰すわけにはいかないとおっしゃって、あの方がくださったのです」と言うと、**

 **3:18 ナオミは言った。「わたしの娘よ、成り行きがはっきりするまでじっとしていなさい。あの人は、今日中に決着がつかなければ、落ち着かないでしょう。」**

**ヘブライ人への手紙13章8節**

**13:8 イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。**

1.

**テレビで見たのか新聞で読んだのか実際に見聞きしたのか、何かでなのかは忘れてしまったのですが、あるご夫婦の話です。そのご夫婦は奥さんからご主人に結婚を申し込んだ、つまりプロポーズをしました。ご主人は奥さんからの「結婚して下さい」のプロポーズに「自分はあなたを幸せにする自信がない」と答えたそうです。すると奥さんは「私はあなたに幸せにしてもらおうなんて思っていないの。私はあなたと結婚することで私たち二人が幸せになれると思うの。だから結婚して下さい。」と言って、ご主人はプロポーズを受けてお二人は結婚することになったそうです。**

**ある結婚情報誌によると2023年度に結婚した夫婦の内、女性から男性にプロポーズした割合はわずか1.3％だそうです。反対に男性から女性にプロポーズした割合は79.8％だそうです。この割合って年によって多少増えたり減ったりするようですが、昔から女性から男性へのプロポーズは全体の1％くらいなのだそうです。時代は変わってもまだまだプロポーズは男性から女性にするものという意識が強いようです。**

**そのわずか1％の女性の中に今日の物語のルツは入ると言えるのでしょう。おそらく聖書に記されている中で女性から男性にプロポーズをした最初の女性がルツであると思います。今日の聖書箇所にはルツがボアズにプロポーズをしたことが記されています。しかもいくらしゅうとめのナオミの命令だと言え、あまりにも大胆な方法に私たちは戸惑いすら覚えてしまうと思うのです。**

**今日の個所はルツの大胆なプロポーズがどうしても注目されますが、ここにあるのは神様の慈しみです。ナオミがルツに落穂拾いをさせてくれてしかも有り余るほど持たせてくれたのがボアズと知ったところ、神様の深い慈しみを知り、その神様の祝福がボアズにあるように祈り願ったことが前の2：20に記されています。これは私とルツだけでなく私の死んだ夫そして死んだ子供たちにも神様が深い慈しみを示して下さった。神様は私たちをお見捨てになっておらずに愛して下さっている。そのことを確信したナオミはルツに対してボアズと結婚することこそがあなたが幸せになれることであるから、ボアズにプロポーズをするように命じたのです。**

**そして、ルツのプロポーズを受けたボアズは10節で「今あなたが示した真心は、今までの真心よりまさっています」と言いました。「真心」と訳されている言葉は、元の言葉では先ほどの神様の「慈しみ」と同じです。ボアズはルツの大胆な行動にルツの慈しみだけでなく神様の慈しみを見たのです。そして、ボアズもまた慈しみに答えて、自分自身がルツにもナオミにも慈しみを現わしていくのです。**

**なぜナオミはボアズこそが神様が慈しみを示して下さった、ルツが幸せになれる結婚相手だと確信したのでしょうか。**

**先の2：20はこのように続きます。**

**「その人はわたしたちと縁続きの人です。わたしたちの家を絶やさないようにする責任のある人の一人です。」**

**ボアズが親戚であり、しかも「私たちの家を絶やさないようにする責任のある人」であるというのです。ある聖書の訳では「買い戻しの権利のある者」と訳されています。買い戻しの権利のある者とはどういうことかと言いますと、レビ記25：25（203頁）にこのような規定があります。**

**「もし同胞の一人が貧しくなったため、自分の所有地の一部を売ったならば、それを買い戻す義務を負う親戚が来て、売った土地を買い戻さねばならない。」**

**ナオミの夫であるエリメレクはかつてベツレヘムに家族と共に住んでいました。そのベツレヘムを飢饉が襲ったためにエリメレク家は食糧を求めてモアブの地に移り住んだのです。その時に、エリメレクは先祖から受け継いだ土地を手放してモアブの地に土地を求めたのです。しかし、エリメレクは死んでしまい、二人の息子マフロンとキルヨンもオルパとルツというモアブ人女性と結婚しましたが、子どもを残さずに死んでしまいました。残されたナオミには今はモアブ人の嫁ルツしかありません。もう土地も財産も何もないナオミとルツ、そんな二人の前に現れたのが「買い戻しの権利のある者」であるボアズなのです。彼はエリメレクが手放してしまった先祖からの土地を律法の規定に従って買い戻す権利があるのです。それはすでに風前の灯火と言えるエリメレク家を絶やさない責任があるとも言えるのです。さらに、ボアズは申命記25：5に記されているレビラート婚の相手でもあるのです。ルツを妻として迎えてエリメレク家を絶やさない責任も持っているのです。**

**このように「買い戻しの権利のある者」ボアズがルツと結婚することがルツにとってもナオミにとっても、エリメレク家にとっても幸せになれる最善の道であり、その様な相手に神様は慈しみを示して下さって出会わせてくださったとナオミは考えたのです。**

**さらに、ボアズの畑での落穂拾いの様子をルツから聞き、貧しいやもめのルツに落穂を拾わせてくれた、それはレビ19：9～10が定めている弱者への慈しみをきちんと守る律法に忠実であり神様への信仰がしっかりしている素晴らしい相手と神様は出会わせてくださったとナオミは確信したのです。**

**しかし、ルツはモアブ人の女性です。一人の異邦人の貧しいやもめ。一方ボアズは有力なユダヤ人。いくら律法に忠実で神様への信仰が立派なボアズでも異邦人であるルツと結婚することをすんなりと受け入れてくれるか、喜んでその責任を全うしてくれるのかというとナオミは難しいと判断したのです。だからこそ、あえてルツに「体を洗って香油を塗り、肩掛けを羽織って麦打ち場に行きなさい」と非常に大胆な行動を取らせたのです。いわばこの方法しかなかったのです。**

**夜半、ボアズは一人の女性が足元に寝ていることに気づきます。「お前は誰だ」。「わたしは、あなたのはしためルツです。どうぞあなたの衣の裾を広げて、このはしためを覆ってください。あなたは家を絶やさぬ責任のある方です。」（9節）ルツは意を決してボアズにプロポーズをしたのです。**

**もしボアズがいい加減な男性であればルツを辱めてもてあそんだでしょう。しかし、ボアズはルツの大胆なプロポーズに「真心」「慈しみ」を見ました。その慈しみはルツが今までしゅうとめのナオミにどこまでも忠実に仕えてきたその慈しみ以上の慈しみを見たのです。異邦人であるのに主なる神様を信じて「御翼のもとに逃れてきた」（2：12）だけでなく、律法の規定をきちんと守りその責任を果たそうとする、それはルツの信仰とも言えるのです。ボアズはルツの信仰を見て、その信仰を与えてくださった神様の慈しみをそこに見たのです。主は生きておられる、神はルツにもナオミにも慈しみを示して下さっている愛して下さっている。だからこそ、ボアズも神様の慈しみに慈しみを持って答えようとするのです。自分以上に買い戻しの権利がある者がいるが、その者が責任を果たさないのであれば、「わたしが責任を果たします」と誓うのです。**

**ボアズがルツを家に帰して大麦6杯を背負わせたのはボアズの決意の現われです。ボアズはルツだけでなく、そのしゅうとめのナオミもしっかりと養う、あなたたちのことは私が守りますの決意の現われなのです。それは言い換えれば、私はあなたたちを愛していますとの愛を示したと言えるのです。ナオミはボアズの決意を確信しました。ですから、ルツに時を待てと命じたのです。ボアズは今日中に決着をつけると信じたのです。**

**「主は生きておられる。わたしが責任を果たしましす。」（13節）**

**ルツのプロポーズに対してボアズはこのように応えました。ボアズ以上に最優先の責任ある者が責任を果たさないならという条件付きではありますが、ボアズは覚悟を決めていました。ボアズが買い戻す者となる、これはボアズにとって非常に責任の重いことです。どれだけの代価を支払わなければならないのか、とてつもなく大きな金額かもしれません。もしかしたらそのために自分の土地を手放さないといけないのかもしれないのです。多くの雇人が困らないように働き口を探さないといけなくなるかもしれません。異邦人女性のルツと結婚するということはユダヤ人の習慣からすると決して周りから喜ばれないことかもしれないのです。さらに年老いたナオミのお世話もしなければならないのです。それはボアズにとって大きな犠牲を伴うものなのです。大きな痛みを追ってでも「わたしが責任を果たします」と答えて愛を示すのです。主なる神様が生きておられるからです。主なる神様が生きておられて私たちに慈しみを示し、愛を示して下さっているからです。**

**「わたしが責任を果たしましす。」私はボアズのこの言葉とイエス様が十字架へと向かわれる姿と言葉と重なりました。イエス様を裏切ったユダと兵士と下役たちはイエス様を捕まえにやって来ました。何もかもご存じのイエス様は「だれを捜しているのか」と問い、彼らが「ナザレのイエスだ」と答えると、イエス様は「わたしである」と答えられたのです。そして「父がお与えになった杯は、飲むべきではないか」とお答えになって十字架へと向かわれたのです。（ヨハネ18：1～11）。それは「わたしである。わたしはこれから十字架にかかるのだ。あなたたちの罪を贖うために十字架にかかるイエスキリストこそわたしである。父なる神は生きておられる。私たちに慈しみを示し、愛を示して下さっている」とのイエス様の愛ゆえの覚悟の言葉とボアズの「わたしが責任を果たします」の言葉が重なりました。**

**「わたしが責任を果たします」この言葉を直訳すれば「わたしが贖う者となります」です。ボアズは「わたしが贖う者となります」と大きな犠牲を伴い、大きな痛みを追ってでも贖う者となる覚悟を示して愛されている者として愛を示したのです。**

**贖う者、このボアズの姿はイエス様のお姿を表していると言われています。神の愛ゆえに贖う者となってくださったイエス様です。「私が贖う者である。私がイエスである」そう宣言して私たちを愛して下さり、私たちを罪から救い出すために十字架にかかり、痛み苦しんで血を流し自らの命という大きな大きな犠牲を払って代価を払って私たちを贖ってくださったイエス様。このイエス様こそが私たちの贖い主であり、私たちの救い主なのです。**

**「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。」（エフェソ1：7）**

**これが神様の愛なのです。御子を十字架に掛けて命でもって贖い、救い出し、死から甦らせてくださった、そこまでして私たちを愛して下さっている神様の愛なのです。神様は今も生きておられて私たちにイエス様の十字架と復活の愛を示して下さり「私の愛を信じるか」「私を愛しているか」と私たちに問いかけてくださっているのです。それは、冒頭に紹介しましたご夫婦のように神様が私たちにプロポーズをして下さっていると言えるのです。「私はあなたを愛している。私の愛を信じるか。私を愛しているか。」の問いに「はい。」とお答えすることで私たちは大きな喜びに生かされるのです。**